独り寝

機械音がする。鑽孔、磨擦の音は、響く。組立の時は静やかだ。もう長い年月左右してきた。思索、追究、実地。失敗は数知れない。と言うより、成功を、したことがない。今度もそうだろうと思っていた。然し失敗を恐れたことはなかった。この製造を諦らめれば、自分の命には意味がない。加須貝には、其事が瞭然とわかっていた。

外貌を整えるのは、案外易い。しかしいつだって中身が問題となるのだった。加須貝は、機械を製っていた。人間其物の、ロボット。喋舌り、動き、愛するロボット。夫が加須貝の夢だった。

夢は半叶った。いや、半といっては、過言になるか。加須貝が完成させたのは、考え、喋舌る機械だった。動きもしないし、愛情も分らない。正直に言えば、考えるというのも、怪しい。喋舌るにしても一語で終った。加須貝は落胆も抱いたが、しかし概ねは満足した。

完成した当夜、達成感があったのかといえば、なかった。愈大詰という所までくると、寝食を忘れ、製造に励んだ。だから作り上げた直後にはまず寝た。始動させてみたのは起きてからで、加須貝はこれまでの経験則から、どうせ動かないだろう、と思っていた。形丈完成させたことなら何度かあるが、動いた例はなかった。今度は何所を間違えたのだろう。結果が出る前から、其様なことを考えた。

だから動いた時は魂消た。機械は「はい」といった。加須貝は狼狽たえてしまい、「お前はだれだ」という意味の分らない質問をした。しかし、機械が自分で気の利いた返答を考えるのではという予期があった。機械は答えなかった。思考に手間どっているのではと思い待ったが、沈黙は続いた。答える気がないのだと分ると落胆した。然

し、これは大いなる一歩だと自分を鼓した。人類の？　そう考えて、自嘲した。

腹が減っていることに、気づいた。「料理を、つくってくれないか」機械に命じた。「食材は、上にある」機械はまず沈黙を拵らえた。たっぷり間をとったあと、「できません」と冷淡に答えた。

「できないってことが、あるか」君はロボットだぞ、といいたかった。しかし機械はまた「できません」と言った。「なんで、できないんだ」加須貝は質問をした。然し機械は沈黙した。随分思考に手間取るんだな、と思ったが、今回の質問にも機械は答えなかった。「もう、いい」加須貝は怒って自分で料理を作った。甘くできたので、加須貝は満悦した。

腹を満たして降ると、機械は全たく同じ姿勢の儘動かずにいた。「好きな様に、寛ろぎなさい」加須貝は寛容さを示す為、声をかけた。しかし機械は答えもしないし、動きもしない。「どうした」といっても、反応しない。壊れたんじゃあと思い、語勢を強めた。「おい」「はい」「壊れた訳じゃあ、ないんだな」「はい」「じゃあ、どうして動かない」「……」「まさか、動けないのか」「はい」

加須貝は落胆した。何となく、機械ができたら、家事はやってくれるものと思っていた。然し、熟く考えてみると今まで家事は自分でしてきた訳だから、そう手間でもないかと思い直した。どこかに故障がある訳だから、夫は後で捜せば可いだろう。いまは完成した喜びに浸るべきだ。加須貝はそう考え、機械のことをしけじけと見た。

顔は、異国の映画女優に材を取った。加須貝が生れる前に活躍した女優で、映画を見て彼はこんな美人が人間として存在していいものかとまで思った。余の人間と、余りに不公平ではないか。その「他の人間」には、自分も含まれていて、加須貝は我知らず顔を紅くした。其時の気もちが今不意に蘇返り、加須貝は機械から目を逸らした。胸が搏動した。機械は眼球を動かすことさえできないらしく、唯一点を見つめて揺がなかった。

夫から、加須貝は、彼女を製造した研究室で時を過すようになった。大抵、本を読む。機械が自分から話すことはなかった。加須貝は始め夫を不満に思い、のちに馴れてからも落着は得られなかった。加須貝はまず、「なにか、話しをしてくれ」と機械に懇切った。機械は暫らく沈黙した後、「なにも知りません」と答えた。加須貝は意外に思ったが、生れた許なのだから、当り前のことだと思い直した。考えを直しても沈黙を苦しく感じた。相手は機械だ。そう言い聴かしても、気詰りを感じた。機械にまで、気を遣うなんて。加須貝は自分の性質を苦々しく思った。仕方なく自分から話し掛けたが、機械の返事は何時でも素っ気なかった。

機械が完成してしまうと、始めて退屈を感じた。二六時中製造に時間を費やして来たのだから、当り前のことなのかもしれない。機械が動ける様に修繕をしようかと思い立つが、気分がのらない。なぜだろうと思った。退屈をする位なら、機械を動けるようにして、家事でもしてもらえばいいじゃないか。しかし加須貝は家事をするのが好きだった。家事をする時間まで奪われたら、何うすれば好いのか。加須貝は奪われるという大仰な表現を使った。それ程、時間というものを惧れた。然し意識に対しては退屈が嫌いな丈だという言い前にした。「動けるように、なりたいか」たずねても、当人である機械は答えなかった。だからか加須貝は本格的な修繕にのり出さなかった。

点検丈はした。しかし実働部分には問題がなさそうだった。人間でいうなら、肉體は健康だが、脳に損傷がある為、筋肉が動かせない、ということになるのかもしれなかった。然しそちらは加須貝の専門分野でない為、確とは理由がわかり兼ねた。加須貝は暗い気持になった。やはり、自分は。其先は言葉にしたくなかった。機械を見つめたが、機械は必要でないことは喋舌らない。

「名前を、命けてやろう」

加須貝は言った。機械は無論答えない。「絵布という名前はどうだ。正式に発音すると、イエフ、だったかな。学生のときにちらっと習った丈だから、忘れちまった。たしか、愛情、って意味の単語だった筈だ。お前は、段々、智識を殖やしていける筈なんだ。その内、愛情の事を、分るようになってくれよ」加須貝は機械に諭した。

機械は暫く待ったあと、「はい」といった。加須貝は夫で満足した。対話というのは、単なる言語の応酬の事だろうか。夫とも、知性と知性の遣取り、さらには衝突した後の発展のことを言うのだろうか。加須貝には、関心がなかった。機械が機械である以上、対話の定義抔に果して意味があるだろうか。加須貝はこの様に考えた。加須貝の関心は、言語抔より、固よりこの方面、機械に関しての知識に集まっていた。加須貝は宏範に勉強した。その理由を、加須貝は思い出したくない。劣等感許りがあった。だから只管に勉強した。でもだれにも勝てなかった。どの分野でも、どれ丈時間を費やそうとも、天才というのは必らずいた。天才の量にも又差異はあったが、加須貝はそれを天分によるものと解した。自分は天から選ばれなかったんだ。加須貝は自分の努力が報われないと感じた時、絶望的に独語いた。

こどもの頃は良かった。優等生で、ちやほやされた。しかし、学年で一位をとる程のことはなかった。中学生の時、学年の成績が三位だった。彼奴らは、勉強しすぎてんだよ。加須貝は友人達と談話し、上位の者を笑った。通常の努力で、相応以上の績を収め得る自分を上等に感じた。夫が覆えったのは大学に這入ってからで、大学には、簡便に言うと学年の一位、二位、三位の人間が鳩まっていた。加須貝はあの時嗤った糸かな差が、いま撃砕し得ない壁となって現前していることを感じた。自分は、一位には成れないんだ。加須貝はそれを認めたくなかった。

友人たちにも似たような環境の人はいて、そういう人間は、大抵放蕩にふけるか卒業丈を目標にするかしていた。加須貝は研究職を志した。なんとしても伍して遣るのだと身を粉にした。其努力の

甲斐あって、加須貝は跟いて行けた。牽っぱるのではなかった。伍してやるだ抔と目標の低い人間が、天才になれるわけはなかった。加須貝は縋みついた。是を諦らめたら、己は終なんだと叫びながら、……

加須貝は機械を見つめた。機械の外貌は余りにきれいで、夫だけ自分の劣等感の深さを思わせた。「おれは女を知らずにきた」機械にいっていた。「完成しないと思ってたんだ」機械は答えない。「お前のきれいな、その顔……」機械は目線さえ動かせない。

食糧には限りがある。巨大な冷凍庫に入るとき、加須貝はつきる前に機械が完成した事を好運に思った。後、一年は、全然もたないだろう。自分が死んだあとの機械の事を考えた。メンテナンスもされず、朽ちる様に少しずつ壊れて行くのだろう。加須貝はなぜ自分が機械を造ったのだろうかと思い出した。答えがなかったことに狼狽した。見返す為だったのか。自分一人でも、完成し得るのだと。誰に。今はもう誰もいないのに、誰も自分の偉業を認めてくれないのに。偉業。あんな中途半端な機械が、偉業と言えるのか。或はさみしかったのかもしれない。加須貝は理由を挙げていって、同時に否定する自分がいるのを感じていた。

加須貝は死ぬことにした。是は自殺と呼べるのだろうか。何ずれ餓死するのは避けられないのだから、危篤の際の安楽死と選ぶ所はないのではないか。加須貝は死の方法を案出した。一番いいのは、切腹か。加須貝は古式の自殺方法に憧がれを覚えていた。あんなのが出来る人間は、そういない。西洋との最大の違いは、死のための持続だろう。銃で顳顬を撃つのは確かに怖かろうが、痛みは一瞬だ。切腹は、自分で腹に刃を入れ、さらには動かさなければならない。下手を打てば苦しみは増すばかりだ。介錯無しでは死に損うことも多いという。加須貝は切腹で死ねれば男を立てられると思ったが、自分にはむりだと思い直した。

では首を吊るか、高い所から飛び下りるか。どちらも、不様だなと思った。処理をする人間は誰もいないのに、自分の死骸が朽ちていくのは想像するに堪えない。加須貝は世界の一部になりたかった。肉が融け、土に還り、畜生に食べられる自分を想像した。循環の一部になるんだ。加須貝は涙さえ流し兼ねない程冀ったが、涙を流すのは陶酔になる気がして、結局流れなかった。

「泣いて見たいと思うか」加須貝はロボットに尋ねた。機械は答えなかった。「俺は昔、泣きたかった」加須貝は独語いた。「泣くのが感情の証明になると思ってたんだ。俺は機械見たいになりたかった。夫でいて、心の部分には熱い血が流れて居て欲しかった。夫は悲しいって気もちより、涙の方を重く見るってことだ。笑うだろ。破綻してる。でも其様なのに気付かない人間は大勢いて、俺は特別だと思いながら、仲間に這入りたがった。左様いうことじゃないんだ。特別ってのは、自分ってのは。只自分のこと丈見てればいいんだよ。特別も、仲間もないんだ。自分は、自分で、それ以外のものじゃないんだよ」加須貝は機械のことを見つめた。

加須貝は自嘲した。「お前は奇麗過ぎる」その声と、機械の「はい」と答える声が一致した。加須貝は糸かに笑ったが、機械は笑わなかった。「笑いたいと、思わないか」加須貝は答えを予期していた。「俺だって笑いたい……」機械は今度は「はい」と直に答えた。

自分が服薬に仗り自殺することを、加須貝は何となく分っていた。楽な方法を選びたかった。苦しまずに死にたかった。大量の睡眠薬を飲んで、眠りの先へ行こう。加須貝は機械に「さよなら」と告げた。

機械を外まで連れ出した。荒廃した土地には糸かに花が咲いていて、加須貝は名前も知らない自分を慙じた。勉強をするより、大事な事があったんじゃないのか。そう自問したが、過去の自分を否定したくはなかった。あの時は、あれが凡てだった。凡てを捨てて構

わないと思った。夫で機械を得たのだから、文句はいうまい。結論に達しても、蟠まりは残った。

加須貝は睡眠薬を飲み、横になり、機械に話し掛けた。「此所は寒い」機械は答えなかった。「俺は、いつでも寒かった。心がだ。誰かに温めて欲しかった。でも俺はそんな自分を嘘にしたんだ。弱さを認めることは弱さなんだと思った。違うんだ。弱さが弱さな丈で、夫を攫まないことは、ただの臆病なんだ。俺は只認めて遣ればよかったんだ。弱さのことを。ちゃんと見て上げれば好かったんだ。温めて欲しい！　叫ぶ俺は愚かだろうか。俺は誰かに聞いて欲しかったんだ。助けて欲しかった。でも知ってるか？　助けて欲しい時には、助けてくれって言わなきゃいけないんだよ。どんなに悲しい顔してても、誰もいない所で呻き声上げてても、ちゃんと誰かに向って助けてって言わなきゃ、誰も助けてくれないんだよ。誰も察しちゃくれないんだ。当り前のことだろう？　俺が何を察せる。俺が誰の悲しみをみつけ出せる。みつけ出せない俺が、他人が察してくれないことを嘆くなんて、傲慢が過ぎるじゃないか？　俺は長い間気づかなかった。気づかないふりをしてたのかなあ……誰か、そばにいてくれ！　誰もいなけりゃ言えるんだ。恥しくないから。でも、誰かに言うのは、恥しくて……」加須貝は「責めてお前は、ずっと側にいてくれ」と機械に向って言った。

機械は長い沈黙の後「できません」と答えた。加須貝の意識はもう溷濁していて、言葉を判別できなかった。加須貝は高く手を掀げた。「俺は、世界の、一部になるんだ！」機械は「はい」と答えた。加須貝はやがて死んだ。機械は動かずにいた。風が吹いて、雨が降って、機械は立ち尽くした。土の柔かさの上にいた。花の匂いが届く場所にいた。太陽は変らず凡てを照らす。あらゆる生命が、呼吸をし活動をする。